

沈潜期以後

——社會主義同盟の解散まで——

近 藤 憲 二

幸徳事件直後の形勢

明治四十一年七月、神田錦旗館に於ける山口孤劍の出獄歓迎會が解散を命ぜられた時、度び重なる迫害に憤激した同志十數名が「無政府共產」と大書した赤旗を街頭に翻へして警官隊に突撃した事件があつた。世にいふ『赤旗事件』である。この結果は、官吏抗拒及び治安警察法違反として、堺利彦、山川均、大杉榮、荒畑勝三、百瀬普、村木源次郎、宇都宮卓爾、森岡永治、佐藤悟等十名の投獄を見た。

越えて明治四十三年六月、突如として一世を震駭せしめた謂ゆる『大逆事件』が起つた。この事件の内容は今猶ほ

一つの謎であり、且つ茲にそれに就いて述べる自由を持たないのであるが、兎も角もこれによつて、幸徳傳次郎、菅野須賀、大石誠之助、森近運平、新村忠雄、奥宮健之、宮下太吉、成石平四郎、内山愚童、松尾卯一太、古河力作、新美卯一郎の十二名は死刑。高木顯明、飛松與次郎、坂本清馬、崎久保誓一、岡本頼一郎、武田九平、三浦安太郎、岡林寅松、小松丑治、佐々木道元、峰尾節堂、成石勘三郎の十二名は無期徒刑。新村善兵衛、新田融の兩名は懲役八年及び十年に處せられた。

この二つの事件があつてから、政府官憲の社會主義運動に對する弾壓は眞に酷烈を極めたものであつた。日露戰爭に際し敢然として非戰論の叫びをあげ、其後、惡戰苦闘の

結果刻々にその地歩を進めつゝあつた我が社會主義運動は、この暴壓によつて突然として暗黒へ突き落されたのである。死刑、無期徒刑、そして精銳なる十數名の投獄。いや、それだけではない、從來の社會主義出版物は悉く禁止された。新聞雑誌は發行を許されず、集合結社の自由は全く奪ひ去られ、同志は四散して影を沒した。しかもこの間に、政府は脅迫的買収の手段までも弄したのであつた。かくて日本の社會主義運動は、根こそぎ敲き伏せられ、再び芽をふくことのないかと思はれるほどの、慘憺荒涼たる時代を來したのである。

社會主義運動の復活

しかしながら、この息づまるやうな重壓をもつてして、一度び植えつけられた自由への思想を根絶し得るものではない。先人が血をもつて蒔いた種子である。幹は打ち倒され枝葉は風に吹き飛ばされたとしても、種子は既に地上に落ちてゐた。地上に落ちて萌芽の時期を待つてゐた。地中に深く延びてゐた根も再興の準備を怠りはしなかつた。この新しい種子のために苗床の役割を勤めたのは賣文社であつた。

賣文社は、赤旗事件の刑期を終へて出獄した堺利彦の創立にかかるもので、素より一個の職業として、その名の示す如く文案翻譯をもつて衣食せんがために設けたものに相違なかつたが、大杉榮、荒畑寒村が『賣文社技手』と稱してこれに加はり、高島素之が來り投ずるに及んで、賣文社は又一面、社會主義者の一俱樂部たるかの觀を呈するに至つたのである。

やがて、この苗床から一つの芽生えを見た。大正元年十月に創刊された月刊『近代思想』がそれである。『近代思想』は大杉榮、荒畑寒村の二人によつて創められたもので創刊當時の雑誌の内容は、科學、哲學、社會學等の抽象論、又は小説などに隠れて、知識階級の青年に社會主義的な或る暗示を與へるといふ程度のもので、素より純然たる社會主義機關誌といふわけにはゆかなかつたが、しかし兎も角もこの旗上げは、大逆事件以後の沈黙を破る最初の呼子であつた。恐怖時代にあつて、或は姿を消し聲をひそめ、或は猫の如く柔順を装うてゐた同志が、これによつてどんなに勢ひづけられたか知れない。賣文社が當時の唯一の城砦であつたとすれば、近代思想社同人の事業と行動とは、社會主義運動の復活を告げる喇叭であつたのだ。

『近代思想』は號を重ねるにつれて漸次にその鋭鋒の尖端を現はしはじめた。雑誌發刊の目的が鐵鎖に對する反抗の叫びであることは、誌面の到るところに窺はれるようになった。抑へきれない創造的運動の脹らみが、次第々々にむく／＼と誌面を動かしはじめた。同時に、堺利彦等の社會主義に對して、無政府主義乃至はアナルコ・サンチカリズムの思想が大きく脈うちはじめたのである。大逆事件以前既に存在してゐた社會主義運動に於ける二つの流れ、即ち社會主義と無政府主義、更に言ひ換へれば議會政策と經濟的直接行動との二つの流れが、茲に又新しい流れを見たのである。

従つて近代思想社の事業は雑誌の發行だけに止まらず、翌大正二年七月から『センデイカリズム研究會』を開くことになつた。研究會は、齋藤兼次郎、百瀬普、吉川守邦、橋浦時雄等の舊い同志で幾人かの新しい青年を加へた十數名の小さな集りに過ぎなかつたが、大杉と荒畑とは歐米社會運動の情勢やクロボトキン、バクウニンの思想を紹介し、或はまた具體的宣傳の講演をして、熱心にこの集りを育てて行つた。

ところが、この研究會が熱を加へるにつれて、會員中の

舊い同志の心も段々とただの研究では物足らなくなつて來た。大杉と荒畑も文學青年相手の『近代思想』では辛棒がし切れなくなつた。冒險の快感を味はうとする賭博本能が、からだ中に満ちて來たのだ。大杉榮が『近代思想』の大正三年五月號に書いた「智識的手淫」と題する一文は、當時の彼等の心境を露骨に物語るものである。ここにその一節を引用して置く。

『讀者諸君の多くも同様のことだらうと思ふが、寒村と僕とはもう、此の雑誌のやうな intellectual masturbation (こんな英語があるかないか知らんが、譯すれば智識の手淫とでも云はう) にあきあきして了つた。吾々に情慾の、しかも極めて強烈な情慾のある以上、それは何等かの方法を以て常にもたらされなければならぬ。masturbationも時によつては必須事である。けれども僕等は、僕等に取つての此の不自然事に、つく／＼厭氣がさして來た。僕等の自然事に歸らなければならぬ。

『この意味から、僕等はもはや、今のままの「近代思想」の發刊を續けて行く事が出来なくなつた。形式も内容もまるで一變させなければ、もう承知が出来なくなつた。hourglassの青年を相手にして、譯の分らぬ抽象論をするかは

りに、僕等の眞の友人たる労働者を相手にして、端的な具體論に進みたい。』

かくて『近代思想』は創刊後滿二年、大正三年九月これを廢刊し、翌十月から月刊『平民新聞』の發刊を見たのである。

サンチカリズム運動の發足

『平民新聞』の叫びは労働階級への叫びであつた。『近代思想』當時の文藝的ベールを脱ぎすてた、短促なる宣傳機關であつた。

『吾々は労働者である。自己及び自己の社會的地位を自覺せる労働者である。而して吾々自身と此の地位とを改善すべく、現社會の根本的變革を迫らんとする叛逆的労働者である。……本誌の目的は、此の確固たる自覺を吾々の仲間の労働者の間に喚び起す手引となり、又此の自覺によつて欲求する奴隸的地位の改善と、及び此の改善を妨げる一切の社會的制度に對する階級戰爭的叛逆との、不撓の機關たらんとするに在る。』

これが、第一號の冒頭に述べられた決心である。そして、『労働者の解放は労働者自らの仕事でなくてはならぬ察

といふのが同新聞のモットーであつた。アナルコ・サンチカリズムの影響と、及び日本に於けるその發足とは、茲に拔萃した短い文章の間にも充分に見られるではないか。

『平民新聞』は素より片々たるものであつたが、戰意は紙面に充ち満ちてゐた。息の根の限りに吹き續けられた進軍喇叭の響は勇しいものであつた。幾年かの間全く沈滞しきつてゐた運動は、茲にやうやくその再興を見、新しい脈が高々と打ち初めたのであつた。

『センデイカリズム研究會』は『平民講演』と改稱され、出席者も漸次に數を増して、具體的運動に移らうとする周圍氣は益々濃厚になりつゝあつた。ところが、この情勢に對して官憲が傍觀的態度をとらう筈がない。『平民新聞』は、一、二、三號と續けさまに發賣頒布を禁止され、第四號は皮肉にも全面轉載記事を以て埋め漸く禁止を免れたが、五號六號は又も續いて禁止されたので、大正四年三月、遂に廢刊の止むなきに至つた。

同年十月『近代思想』が復活された。その内容は、『平民新聞』と前の『近代思想』の合の子と見るべきもので、稍や前者の色彩が勝つてゐた。渡邊政太郎、山鹿泰治等が『の嚴重な警戒網をくぐつて東京及び附近の工場地に宣傳

物の配布に努めたのも此頃である。しかし『近代思想』は又々連発的な禁止の厄に遭ひ、第四號を以て倒れた。後期『近代思想』の主張はやはりアナルコ・サンデカリズムのそれであつたが、大杉には無政府主義の傾向が著しく、荒畑にはトム・マン等の思想の影響が尠なくなつた。

一方、堺利彦は、兼ねて賣文社の廣告機關として發行してゐた『へちまの花』を改題して、大正四年九月、月刊『新社會』を發刊した。堺は議會政策を是認する社會主義者であつたが、この『新社會』發刊の辭「小さき旗上」に於て次ぎの如く述べてゐる。

『関を作つて勇ましく奮ひたつたと云ふ程の旗上では勿論ないが、兎にかく是れでも小さな紙旗の旗上には相違ありません。先づは落人の一群が山奥の洞穴に立籠つて、容易に敵の近づけぬ斷崖を待みにして、蕨葛の根に餓を凌ぎ、持久の策を講ずると云ふ、みぢめではあるが、且は聊か遠大の志を存する義軍の態度であります。従つて、明日や明後日に山を下つて、敵の戦線に逆襲を試みると云ふ企てもないが……只遠近の同族と穢かに相呼應して、互に勵まし慰さめつゝ、おもむろに時機を待つ決心は、可なりに堅く致して居る積りである。……若し夫れ、來つて此の山

案に投じ、或は遙かに此の孤軍を援けんとする者があるならば、戦術の相違、軍略の差異、それらは今深く争ひだてをする必要はない。只大同に従つて相共に謀れば善いと信じてゐる。』

これによつても見られる通り、堺はこの雑誌を同じ立場の者だけの獨占にはしなかつた。『大同に従つて相共に謀』つた。従つてその誌面にはいろんな色彩が現はれ、堺、高島等の議會政策と、山川、荒畑の經濟運動とが相論争されたやうなこともあつた。

労働組合への新運動

歐洲大戰の進行すると共に、歐米の聯合國側に於ける標語が『軍國主義に對する民主主義の戦争』といふことになつた。この標語が、急に、既に數年前から日本の思想界に兆してゐた民主主義熱の勃興を來さしめたのであつた。かういふ雰囲気の中にあつて、しかも戦後の労働運動の勃興は何人にも豫想され得る時に當つて、日本の社會主義者が單なる思想戦に止まつてゐる筈がない。嘗て日清戦争後に片山潜等が辿つた道に歸つて、労働者の間の傳道と組織とに更に力強い足を踏み入れようとしたのは當然である。そし

てこの目的のために、大正七年春、大杉榮は久板卯之助、和田久太郎等と共に月刊『労働新聞』を、荒畑寒村は山川均と共に『青服』を、殆んど同時に發刊した。この二小新聞は、殆んど隔月發賣禁止の厄運に遭つたが、同年十月、山川、荒畑、久板、和田が新聞紙法違反で投獄されるまで兎も角も發行を續けて、少なくとも東京の労働者の間には毎月數千部づつ配布された。これ等の新聞を援けたのは以前からの社會主義者だけではなく、多くは新しく集つて來た労働者であつた。當時、上野櫻木町には『労働問題座談會』が、小石川指ヶ谷町には『研究會』が開催されてゐて、無政府主義又はアナルコ・サンデカリズムに就いて研究討論をしてゐたが、この會合に出席する人達が新聞を各所の工場に持ちこんでゐたのである。後にこの二つの會合は合併されて『北風會』と命名された。『研究會』の創立者であつた渡邊政太郎が死んだので、その號の『北風』に因んで名づけられたのである。

歐洲大戰は日本の經濟界に好景氣を齎した。産業は急に勃興した。百萬長者は億萬長者となり、成金は續出した。労働者の賃銀も上つた。しかし、物價の暴騰は、益々甚だしくなる未曾有の生活難に陥れた。奸商や成金の豪奢

は全民衆の憤怒の的となつた。が、政府はこの奸商等の種種なる物價引上策に對して殆んど何等の爲すところもなかつた。又、その多少の物價調節策も全く何等の効果をも示さなかつた。ストライキは激増した。しかし金儲けに忙しい資本家と、その擁護者である政府者とは、この労働者の要求に對して殆んど顧みもしなかつた。

そこへロシア革命が起つた。ロシア革命！労働者の

天下！この一大事實が、この地球の上に、我々の住むこの地球の上に、しかもツァーの専制國家に成し遂げられたのである。ロシア革命が其後どんな道を辿つたか、又辿りつつあるかは別問題として、兎も角もその當時、この事實の前に全世界の民衆は躍り上つたのである。日本の思想界にもそのどよめきは聞えて來た。労働階級は甚大なる感銘を與へられ、日々の新聞紙上に現はれるその通信電報は、非常な興味をもつて讀まれたのである。しかしながら、好景氣に酔つた資本家と政府者は、一種の不安を感じながらも、猶、それは外國のことで日本のことではないといふ安心を持つてゐた。

そこへ突然として、しかし當然に起つたのが大正七年夏の米騒動であつた。ロシアとドイツの革命をもつて遠い外

國の出來事と見てゐた資本家階級も、この足もとの事實に戦慄せざるを得なかつた。

今まで労働階級の悲痛な叫びに耳をかさなかつた資本家階級も、この米騒動によつて周章狼狽し、擧つて社會政策的施設のために寄附金を申し出で、數百萬圓が立ちどころに集つた。政府も、今更らしく急に社會政策を口にし初めた。新たに社會局を設置したのもこれが動機であり、且つ『社會奉仕』といふ言葉が生れたのも此頃である。斯くして資本家及び政府者は、彼等自ら、直接的な行動が最も有効なことを全民衆に知らしめたのであつた。

この機運に乗じて、日本の労働運動は劃時代的の勃興を見た。労働組合は續々として發生し、労働問題の演説會は連日各所に開催された。されどその多くは労働ブローカーの跳躍であつた。御用學者の勞資協調的胡魔化し演説であつた。

その當時、毎土曜日に集合して労働運動の闘士養成所の觀を呈してゐた『北風會』の人達は、それ等のやかまし屋共の演説を片つ端から打ち壊しに行つた。長い間言論の自由を全く奪はれてゐた鬱憤が、これを機會にほと走つたのである。行動は更に熱を生んで、この運動は實に目ざまし

いものであつた。筆者たる僕もこの北風會の一員であつたのだが、僕は茲に遠慮なく斷言することが出来る。北風會のこの時期に際しての運動は、確かに日本の労働運動を戰闘化し、勞資協調への墮落を防ぐ上に一つの功績を残したものである。

労働組合運動の左傾

かくて、ロシア革命と米騒動とは日本の労働運動を刺戟し勃興せしめる機運を作つたのであるが、も一つ、この情勢を促進させたものがあつた。即ち國際労働會議である。

國際労働會議の成立事情に就いて茲に述べる必要はないが、同會議の目的が國際的勞資協調にあつたのは勿論である。戦後に勃興した労働階級を宥めすかしつつ、資本主義の存續發展を期するもので、労働者は謂はばそのダシに使れたに過ぎない。しかしながら、この國際労働會議といふ華やかな舞台は、労働者を眩惑させた。労働ブローカーはその労働代表たらんがために、實質のない看板のみの組合までも作つて切りに奔走した。政府は、日本の労働状態が國際的に曝露されることを恐れて官選労働代表を決定し、隨員として數名の労働ブローカーを選ばしめた。

この胡魔化しは忽ちにして労働階級の憤激を買ひ、猛烈なる示威運動さへも見たのである。そして労働者はこの示威運動によつて、如何に直接的なる行動が有効であるかを知つたのであつた。労働運動は、次第にその量を増しつゝ、又その質をも洗練して行つた。

この時に當つて、大正八年十月、月刊『労働運動』が創刊された。大杉榮、和田久太郎、中村還一、伊藤野枝、近藤憲二等がその同人であつた。

『労働運動』は、創刊號に於て次の如くその態度を表明してゐる。

『日本の労働運動は今、その勃興初期の當然の結果として、實に紛糾錯雜を極めてゐる。頻々として簇出する各労働運動者及び各労働團體の、各々の運動の理論も實際も甚だ明確を缺き、従つて又その相互の間の理解も同情も殆んど全くない。局外者から觀れば、日本の労働運動の現狀は、全くの一迷宮である。そして恐らくは、これは、猶暫くの間の大勢であらう。』

『労働者の反資本的感情が混沌たる紛亂状態を畫きつつ、向う見ずに狂奔して行くのも面白い。その狂奔の間には、各々の力が自然に相衝突し相平均して、各自の進路が

自然に明確になつて行くだらう。しかし又、その間に、各々の力が、自己の進路や他の力との衝突や平均を、確實に意識して行きたいといふ努力を起すのも、やはり自然の事であらう。

『僕等は今、この努力の増進を、日本の労働運動そのものための僕等の首要なる役目の一つだと考へてゐる。本誌は即ちその機關なのだ。日本のあらゆる方面に於ける労働運動の理論と實際との忠實な紹介、及びその内容批評、これが本誌の殆んど全部だ。ただ僕等には僕等の觀察がある。そして、その觀察の上からの紹介や批評には、僕等獨自の多少の臭味が現はれるのも、亦自然の事として餘儀ないことであらう。』

この臭味とは、即ち無政府主義乃至アナルコ・サンデカリズムであつたのだ。

その頃、労働者の間から知識階級排斥の聲が起りはじめた。労働者の間からといふよりも寧ろ、主として印刷工組合信友會及び新聞工組合正進會の中からと云つた方が正確である。この知識階級排斥の運動は、當時の労働運動が次第にその思想を深め自主的運動たらんとした一つの現はれであるから、茲に一言して置くのも余計なことではあるま

労働運動の勃興につれて、知識階級の人でこの運動に参加した者が少なくなかった。その中には單なる同情者に過ぎないものもあつたが、そのほか、職業的労働運動者、資本家的労働運動者、野心家的労働運動者など、いろんなのがゐた。それ等に對して自主的労働者が反感に燃えたのは勿論であるが、彼等は又、理想家的労働運動者に對しても好感を持たなかつた。

理想家的労働運動者は、とにかくに労働者のまだ明確に持たない彼等自身の理想を強ひたがる。その理想に従つて労働者の運動を指導したがる。そして此の理想家等は、お互ひの間の少々の意見の相違から、始終何にやかやといがみ合ひ吠え合つてゐて、そのけち臭ひ争ひの種を労働者の間にまで移し植えようとする。この結果は、當然に労働者の自主的運動を妨碍するものである。

自主的労働者が知識階級を排撃したのは、かういふ理由と實際からであつた。従つて彼等の排撃したのは「知識」ではなくて「知識階級」であつた。知識階級の出しやばりと自惚であつた。しかしながら、當時の友愛會（今日の日本労働總同盟）の中にはこれ等の理想家的労働運動者や職

業的野心家的労働運動者がゐたが、彼等は自主的労働者が知識そのものを排斥するものかの如くに流布して、自己の地位の安全を計ることに努めた。が、やがて、友愛會の内部にも自主的運動が起り、鈴木會長の地位が危ぶまれたこともあつた。

この自主的労働者は、素より經濟的直接行動を主張して議會政策の欺瞞を暴露した。そしてこの議會政策反對の聲は、當時の労働運動の主流となり、労働總同盟さへが、長い間掲げてゐた普通選舉の一項をその綱領から削除したほどであつた。

『北風會』の會員、及び雑誌『労働運動』は、これ等の自主的運動に聲援し、又その先頭に立つて活動した。經濟的直接行動——これこそは當時の自覺した労働者の合言葉であつたのである。

社會主義同盟の創立

日本の労働運動は兩三年間に急速度の發達を遂げ、刻々に社會主義運動と結びつく傾向を見せて來た。労働組合運動者の間には、その頃まで、社會主義を毛嫌ひする一種の癖があつて、一つの溝を造つてゐたのであつたが、この頃

になつてやうやくそれが除かれはじめた。そこへ當然に起つたのが社會主義同盟創立の發議であつた。

社會主義同盟創立の趣旨は、云ふまでもなく社會主義運動の戦線擴大であつた。それが一般的な目的には相違なかつた。が、同時に、舊い同志等の間の確執や冷淡、殊に堺大杉、荒畑等の間の相互の面白くない感情を和らげるといふ、特殊の目的をも含んでゐた。で、同盟の圓滿な成立のためには、いろんな意味で都合のいい、山川均、岩佐作太郎、山崎今朝彌等が最も盡力した。そして大正九年九月、創立發起人會を開く段取りにまで進んだのである。發起人は次の三十名であつた。

赤松 克磨	荒畑 勝三	麻生 久	布留川 桂
橋浦 時雄	服部 濱次	岩佐作太郎	加藤 一夫
加藤 勘十	京谷 周一	近藤 憲二	永沼 辰夫
前川 二亭	延島 英一	大庭 柯公	小川 未明
岡 千代彦	大杉 榮	堺 利彦	島中 雄三
高島 素之	高津 正道	田村 太秀	植田好太郎
和田 巖	渡邊 滿三	山川 均	山崎今朝彌
吉田 只次	吉川 守邦		

以上によつても見られる通り、同盟創立發起人には、舊い社會主義者のほかに各方面の人を網羅してゐた。友愛

會、信友會、正進會、交通労働組合、日本時計工組合、鑛夫總同盟等の労働組合員。建設者同盟、新人會、扶信會等の學生團體員。労働組合研究會、北風會、著作家組合、文化學會、曉民會等の思想團體員。——斯くの如く各方面の人を含んでゐた。各方面の人を含んでゐたと同時に、いろんな色彩の綜合であつた。無政府主義者、サンチカリスト、共產主義者、國家社會主義者、それに民主主義者と云つた方が適當な人も加はつてゐたが、兎も角も廣い意味での社會主義者の協同戦線であつた。

大正九年九月、同盟事務所を麹町區元園町に置き、機關雜誌月刊『社會主義』を發行した。政府は、社會主義同盟が日を追ふて膨脹しつゝあるのを默視してはゐず、常にあらゆる方法手段を以て壓迫したのであつたが、屢々各地に演説會や講演會を開催して同盟員の糾合に努めたので、十二月までには加盟申込者が千名近くにまで達した。そして十二月十日、神田青年會館で創立大會を開く運びに至つたのである。

創立大會は官憲に妨害されて忽ちにして解散されたが、曲りなりにも同盟は成立したのであつた。が、同盟は、翌十年五月の第二回大會後間もなく解散を命ぜられた。

社會主義同盟の陣營は打ち壊はされた。政府の手によつて打ち壊はされた。しかしながら、これは外面的な見方である。同盟員の結束が強固であつたならば、何等かの形式に於て繼續され得たかも知れないのであるが、事實、同盟内部に於ける各派の色彩は漸次その度を加へて、早晚内部的崩壊を來す傾向を存してゐたのである。即ち、一つには友愛會の内部に起つた「組合運動に歸れ」の運動である、これに對する他の急進的組合員の不満である。又一つには、無政府主義と共產主義との思想的争ひである。これ等のものが社會主義同盟の内部にも反映されつゝあつたのであるから、従つて同盟の解散命令に對しても存外冷淡で、大した執着を持たなかつたのである。約言すれば、社會主義同盟は、内部的崩壊を見ようとした時に政府から解散を命ぜられたのであつた。

社會主義運動の二分派

これより先き、大正九年十月、上海で極東社會主義者の國際的聯盟設立の計畫があり。日本の二三の人へもその交渉があつた。聯盟設立の主唱者はロシアの共產黨であつたのだが、東洋では未だ明確な共產主義團體が出來上つてゐな

かつたので、先づ大ざつばに東洋の社會主義者を糾合して徐ろに共產主義の根を張らうといふ計畫だつたように思はれる。このために日本の社會主義者の出席を求めたのだ。しかし、その頃は既に全くボルシエギキになり切つてゐた堺も山川もこれに應じなかつたので、結局大杉が行くことになつた。

上海での集りは豫想通りのものであつた。ロシアを中心としての極東共產黨同盟を押しつけようとするものであつた。無政府主義者である大杉は、勿論これに加はることを欲せず、ただ通信連絡委員會を設けることだけを申合せて歸つた。

大正十年一月、大杉は上海から歸ると直ぐ、以前の『労働運動』の同人に、伊井敏（近藤榮藏、高津正道等のボルシエギキの人達を加へて、週刊『労働運動』を創めた。當時、大杉榮等の無政府主義者は、ボルシエギキとの協同戦線の可能を信じてゐたのだ。従つて週刊『労働運動』の誌上には、無政府主義の論文と共產主義の評論とが平氣で頭を並べてゐた。當時はそれが一向不思議でなかつたのだ。大杉の上海行きによつて國際的連絡の端緒が開かれたのは、日本の社會主義者に具體的な希望を持たせた。殊に

『労働運動』に掲載された次の如き記事は、愈々運動を緊張させる上に與つて力があつた。

『日本は今、シベリアから、××××、支那から、刻々分裂を迫られてゐる。僕等はもうぼんやりしてゐることは出來ない。いつでも起つ準備がなければならぬ。』

『先づロシアを見るがいい。イギリスはどうたう手を引いた。フランスも先づ手を引いた。そしてヨーロッパ・ロシアの最後の反革命運動ウランゲルは没落した。ロシアは、その謂ゆる魔の手を、殆ど自由に、東洋にまで延すことが出来るようになった。シベリアの最後の反革命セミヨノフも没落した。そしてただ一人とり残された日本は、シベリアの謂ゆる赤化に對して、殆んど何んの力もなくなつた。』

『續いて来るのは益々激しくなる××××××××。そしてその結果は日本とロシアとの衝突だ。も一つは新支那の勃興だ。廣東政府の發達だ。もしあの新政府が順序よく行けば、ここ半年位の間に、揚子江の南全部は聯省自治の一大共和國を形づくりに違ひない。日本は例によつて北方を助ける。そして其時に、初めて南方政府とロシアの間に同盟が出来る。斯くして××は、ロシアと××と支那とを敵として戦はなければならぬ。この戦ひが来る時、「其

時」に日本の運命はきまるのだ。

『××××××××、純粹の労働運動や社會主義運動の進行如何に拘らず、必ずここ一年若しくは二年の後に、その絶頂に達する。僕等はもうぼんやりしてゐることは出來ない、と云ふのはそゝだ。僕等労働運動者や社會主義運動者は、この分裂に對してどんな態度をとるべきであらうか。僕等は僕等で、僕等だけの欲する分裂に、まつしぐらに進むべきであらうか。それとも、多少は好ましくない、しかし眼前に迫つてゐるところの、此の分裂に與かるべきであらうか。僕等の態度は「其時」になつてきめていい。けれども、今から心がけてゐなければならぬのは、前にも云つた、いつでも起つ準備がなければならぬ事だ。』

この豫言的な記事は、今から考へれば、稍や妊娠六ヶ月を九ヶ月と誤診した觀がないではないが、それにしても、日本の社會運動を刺戟したところは尠なくなつた。しかし、斯くして保たれてゐた無政府主義と共產主義の協同戦線も、共產主義者の裏切りによつて破壊され、週刊『労働運動』は六月に至つて廢刊した。協同戦線を破つたのは、決して無政府主義者ではなかつたのだ。

尤も協同戦線と云つても、兩者の間に完全な協同戦線が

張られてゐたのではない。共產主義者の間にも『労働運動』誌上での協同戦線を冷笑してゐる者があつた如く、無政府主義者の間にもこれに不満を持つ者があつた。吉田一、高尾平兵衛等の月刊『労働者』の同人がそれであつた。しかし大勢は、やはり兩者の妥協時代であつたのだ。

何れにしても、週刊『労働運動』の廢刊と共に協同戦線は全く破れた。しかしながら、無政府主義者は、ロシアの民衆運動に對する希望を捨てたものではなかつた。ロシアの民衆が共產黨に禍ひされることなく、本當の労働者解放を成し遂げるだらうことを希望し且つ信じてゐた。それだからこそ、大正十年の暮に開かれたモスコウの赤色インタナショナルの大會にも出かけたのである。(尤も、大會出席よりもロシアの真相を見るのが目的だつたのだ。)同大會へ非常な危険を冒して参加した日本の労働者の全部が、無政府主義者及びアナルコ・サンヂカリストだつたのである。無政府主義者はロシアとの連絡を開く上にも決して冷淡ではなかつた。いや、無政府主義者が最もこのために努力したのである。そして、勞農ロシアが資本主義的傾向を加へるのを見るに至つて、労働者を共產黨の膝下に抑えつけるを見るに至つて、初めて排撃の叫びをあげたのである。本

當の労働者解放運動のために――。

かくて日本の社會主義運動には、當然分れなければならぬ二つの流れを見るに至り、この二つの流れが相戦ひつゝ、各々の進路に向つて突進することになつたのである。

【附記】僕のこの運動史は、幸徳事件から社會主義同盟の解散までを、主として無政府主義及びサンヂカリズムの運動のみを追つて書いた。他の各派の運動に就いては、それ／＼ほかの人達が書くことであらう。紙数の關係から甚だ簡略になつたが、止むを得ない。猶、も一つ御注意願ひたいことは、文中の社會主義といふ語である。或る場合にはこれを廣義に、即ち無政府主義も中央集權的社會主義も含めて使つた。又或る場合には狹義に、強權的社會主義のみを指して使つた。讀者は文字に拘泥せず、その場合の異なるに従つてその意義を推知されたい。